

第三章

一 善人 副詞・猶・尚 なお(ほ) もちて もて 往生 遂 をとぐ、
いわ(ほ) 況むや ん(む) いふ(四・未然) + む十や(反語) や 悪人 間投助詞十係助詞 をや。

なおよら。いつそ

いうまでもなく、まして 漢文訓詁表現いわんや…においてをや… …においてはなおさらである

然 ラ変・体 接助 常 副詞 副詞 しかる 常 を、世 常 のひと 常 つねに 常 いわく、悪人 常 なお(ほ) 往生 常 す、いか 常 に 常 いわんや 常 善人 常 をや。
そうであるのに、ところが いつも、始終、よく

断定・用 似

完了

この条、一旦 ひとまず、一応 その ひとまず、一応 いわ(ほ) ひとまず、一応 ある ひとまず、一応 に ひとまず、一応 たれ ひとまず、一応 ども、本願他力の ひとまず、一応 意趣 ひとまず、一応 に ひとまず、一応 そむけり。
悪 ひとまず、一応 第十八願 ひとまず、一応 唯除五逆 ひとまず、一応 誹謗正法 ひとまず、一応

五逆 小乘 殺父・殺母・殺阿羅漢・破和合僧・出仏身血。大乘 寺塔を壊し経蔵を焼き三宝の財物を盗む。仏教を誹り、聖教を

粗末にする。僧侶を罵り責め使う。小乗の五逆。因果の道理を信ぜず十不善業をなす。

十悪・十善 はくあくしゆうぜん 廃悪修善の行 悪(因)↓苦(果) 善(因)↓楽 ぼつくとらく 拔苦与楽

身 ちゆうとう 殺生・偷盜 口 綺語・悪口・両舌・妄語 意 貪欲・瞋恚・愚癡 慢 邪慳驕慢

○阿闍世王 あじやせ 觀經 だいは 提婆 (法華經) と共に頻婆娑羅王を殺害、母・韋提希夫人を幽閉↓釈尊に帰依 (涅槃經)、月愛三昧

○山伏弁円 『御伝鈔』 弁円濟度 「あだとなる弓矢も今はひきかえて西へいるさの山の端の月」

御文 「五逆十悪のわれら」 「五障三従の女人」 御文四帖3

善・悪 悪 『正信偈』 p四、十一、十二、十三、二十五、二十六、二十九、三十、三十一、三十二

そのゆえ(ゑ)は、自力作善の人は、ひとえ(へ)に他力をたのむ ころ かけたる あい(ひ)だ、

※観經 九品往生

偏に まったく

頼む・悪む

欠け

隔たり・すき間・くなので

弥陀の本願に **あらず。**

断定・用 ラ変・未 打消・終止

ラ変・已然

接助

しかれども、自力のころを **ひるがえ(へ)して、** 他力をたのみ **たてまつれば、** 真実報土の

四段・連用

接助

四・用

四・已

しかあれ

翻し

奉れ 謙讓

往生を **とぐる** なり。

下二・体 断定・終止

※小谷信千代『誤解された親鸞の往生論』巴陵、広瀬、山の端の月(はるかに照らせ、西へいるさの)、安部屋

※ 遂ぐる

煩惱具足の **われらは、** いず(づ)れの行に **ても、** 生死を **はなる** こと **ある** べから **ざる** を

代名

代

格 接 係

下二・体

ラ変・体 当然・未 打消・体

「じ」接尾語

にて、おいても

※苦

離れる

あわ(は)れみ **たまひ(ひ)て、** 願を **おこし** **たまう(ふ)** 本意、悪人成仏の **ため** **なれば、**

名

四・用

四・体

断定・已

憐れみ 同情・いとしい・ふびん、ものあはれ

他力を **たのみ** **たてまつる** 悪人、 **もつとも** 往生の **正因** **なり。**

四・体

副詞

断定・終止

接

よつて **善人** **だに** **こそ** 往生 **すれ、** **まして** 悪人は **と、** **おお(ほ)せ** **そ(さ)うらい(ひ)** **き。**

副助

係助

サ変・已

副詞

係助

下二・用

四・用

過去・終止

「けり」

煩惱具足 何か **欠けて** いても、煩惱は **欠けて** いない。 **無明**

結び「すれ」

いうまでもなく

むみょう

二而不二 大乘の **基本理念** ※和 絶対矛盾的自己同一―西田幾多郎、無分別の分別―大拙 雨↓天氣、日々是好

まじか

日

淨穢不二(源信僧都エピソード) 因果不二 機法一体 生死即涅槃 能所不二 往還一致 煩惱即菩提

じようえふふ

に

義なきを義 「唯一」悪人正機